

エルンスト・シャーデ : ルートヴィヒ・エルクの 批判(選択)的民謡集とかれの「民謡」 : 概念(研究 資料)

その他(別言語等) のタイトル	Japanische Übersetzung : Ernst Schade : Ludwig Erks kritische Liedersammlung und sein "Volkslied" : Begriff. : Erstes Kapitel, Leben und Wirken Ludwig Erks.
著者	坂西 八郎
雑誌名	室蘭工業大学研究報告. 文科編
巻	9
号	1
ページ	133-145
発行年	1976-12-18
URL	http://hdl.handle.net/10258/3363

エルンスト・シャーデ：ルートヴィヒ・エルクの 批判（選択）的民謡集とかれの「民謡」—概念

（研究資料）

坂 西 八 郎

Japanische Übersetzung

Ernst Schade : Ludwig Erks kritische Liedersammlung und
sein „Volkslied“ — Begriff. Erstes Kapitel, Leben und
Wirken Ludwig Erks.

Hachiro Sakanishi

ルートヴィヒ・エルクの生涯と活動

ルートヴィヒ・クリスチャン・エルクは、1807年1月6日に中部ドイツのヴェツラーという町に生まれた。父はアーダム・ウィルヘルム・エルク¹⁾といい、その地の小学校教師・教会オルガニスト兼合唱隊指揮者をつとめていた。母はアンナ・バルバラ・エルク（旧姓ゴエート）²⁾といった。ルートヴィヒが4才になったときに父は一家をひきつれてヴェツラーを去り、当時フランス軍の占領下にあったウォルムスに引越した。それは、父エルクがウォルムスでルター派教会学校の教師の職および三位一体教会のオルガニスト兼合唱隊指揮者の地位につくためであった。エルク家はウォルムスにはちょうど一年住んでいただけであったが、この滞在は後日のルートヴィヒ・エルクの成長にとって、大きな意味をもつことになった。エルク家と交際した人の中

には、あのドイツ教育史に有名なアードルフ・ディースターヴェーク(1790—1886年)がいた。かれもちょうど当時ウォルムスで教師の仕事にたずさわっていた。ディースターヴェークは、しばしばエルク家を訪ね、丁度ヴェツラーから来ていたザビーネ・エンスリーン(1794—1866年)という、エルクの母アンナの姪と知り合い、後年この娘と結婚した。ディースターヴェークとルートヴィヒ・エルクはこうして親類になったのであった。ディースターヴェークはのちのちまでなにかとルートヴィヒ・エルクに目をかけ、援助を与えることになった。

アーダム・ウィルヘルム・エルクは一年の後にウォルムスにおける仕事を止め、また家族を連れてフランクフルト・アム・マイン近傍のノイ・イーゼンブルクに赴き、しばらくこの地に暮し、1813年にランゲン近傍のドライアイヒエンハインの役場の書記、教師兼教会オルガニストになった。

この地にルートヴィヒ・エルクは6才から13才まで暮したのであった。この時代に、父と隣の町ゴッツェンハインの教師であったヴィルヘルム・ヴァイマルという人から、オルガン演奏とヴァイオリン演奏に関して、はじめて系統的な教育を受けた。数年の後に父が病気になる、教会のオルガン演奏を定期的には引き受けられなくなると、11才になったばかりの息子ルートヴィヒが父の代理をやったのであった。

1820年1月31日、父のアーダム・ウィルヘルム・エルクは死んだ。12才のルートヴィヒ・エルクは、残された4人の子供の最年長であった。かれは、父の友人でかつ自分の名付け親であったヨーハン・バルタザル・シュピース(1782—1841年)という人にひきとられ、シュピース師がオッフエンバハ・アム・マインに設立していた児童教育施設で教育を与えられた。ついで当地のベルナルト神学校で、同じくシュピース師によって小学校教師になる教育を受け、そしてそのまゝ音楽教師に任命されることになったのである。

ヨーハン・バルタザル・シュピースは、クリスチャン・ゴットヒルフ・ザルツマン(1744—1811年)とヨーハン・ハインリヒ・ペスタロッツィ(1746—1827年)という当時のすぐれた教育家の志向を信奉した人で、当時進歩的

教育家という名声を享受していた⁴⁾。ルートヴィヒ・エルクは、シュピース師をたゞ一般的な教育理論の上ですぐれた先生、指導者と思っていただけでなく、音楽教育の上でもまたすぐれた人だと思っていた。その頃ミヒヤエル・トラウゴット・プファイファーとハンス・ゲオルク・ネーゲリの著作「ベストタロツツイの諸原則による歌唱教育理論」(チューリヒ 1810年)が刊行されると、シュピースは、当時の考え方にとっては最新のこの書物に拠ってベルナルト神学校の音楽教育を実施した。この教育というのは、聴音と読譜の系統的な訓練を要求するものである。

合唱についてエルクが積んだはじめの頃のいろいろな経験は、オッフエンバハに住んでいた時のものである。エルクはある合唱団に参加したが、これはシュピースの援助で編成され、まずアントーン・アンドレ (1775—1842年)、のちにはその教え子アーロイス・シュミットという人が指揮をしたのであった。これは混声合唱団であった⁷⁾。エルクはさらに、ベルナルト神学校の生徒たちと一緒に、当時すでに名声を拍していた隣地フランクフルト・アム・マインの、シェルブルという人の指導下にあった「ツェツィーリエ合唱団」をも訪ねうたったのであった。

さらに、エルクがより深い音楽的教養を身につけるのに役立つのは、当時非常に高い評価を得ていたヴァイオリン教師レーオンハルト・ラインヴァルトとの交友、またアーロイスおよびヤーコプ・シュミット (1789乃至1796年生)との交友であった。この兄弟は2人とも有名なピアニストであって、1824年から25年にかけてフランクフルトとオッフエンバハに住み、シュピースとしげく住き来していた。

1826年にエルクが19才になったとき、アードルフ・ディースターヴェークは自分が校長をつとめているモェルスの師範学校の音楽教師としてエルクを招聘した。エルクはこれに従ったのだが、シュピースは気を悪くし、また人々はエルクを恩知らずだと非難した。これは当然のことである。とはいえエルクがモェルスに赴くにいたった決定的な理由は、その地で得たより高い収入であり、それによって母と妹たちを養うことができ、さらに職業上のよ

りよいチャンスにめぐまれるかもしれないという見込みであった⁸⁾、しかし、エルクはシュピースのために何かをしなければならないとどれほど思っていたことであろうか、これはエルクがのちに自分の最も重要な書物、「ドイツ民謡の宝」(——以下「Eドイツ民謡集」)をシュピースに捧げていることから分る⁹⁾。

モェルスにあってエルクは、小学校音楽教員の養成という新しい任務を、きわめて批判的に遂行した。かれはとくに先ず学校に適した歌集がないことを問題にした。そこでかれは自分の師範学校で用いるために自作の手稿歌集を編纂しようと計画した。この歌集を書物として出版するよというディースターヴェークの提案を、エルクははじめてことわった。しかしディースターヴェークもあきらめず、「さまざまな作曲家による学校唱歌」という本を刊行するようにすゝめた。この学校唱歌が一般の認めるところとして受け入れられるのをみて、エルクは後続の三巻を刊行した¹⁰⁾。

これがきっかけになって、学校唱歌集がのちのち出版されてゆくのであるが、この本は年令(学年)別の順序で、低学年用の子供のうたにはじまり、師範学校生用の多声合唱にいたるという構成である¹¹⁾。さらにエルクは、音楽教育のための理論書も著わした。それは「小学校の歌唱教育のための方法序論」(クレーフェルト 1834年)といったものである。

教職にたずさわっている学校教員にあたらしいうたを提供し、音楽教育の最新の諸方法に習熟させることを考え、かれはモェルスの師範学校における教科課程と平行して、現職教員のための特設コースを一度設けたことがある。またそのほかに、ヒルデンの教師W・シュロエッサーとともに、「山嶽地方教師歌唱祭」を開催し、これを現職教員の継続的教育の会となした。歌唱祭の第一回目は1834年にレムシャイトで開催され、以降ルーアオルト、ドゥイスブルクと場所を変え、また再びレムシャイトで開催された。

音楽教育の領域における活動に並行して、エルクはモェルスの町の公的な音楽生活にも登場した。かれは1835年に有名なフランスのヴァイオリン演奏家フランソワ・フェミ(パリ 1790年生)と何回も演奏会を開いている。

1832年に師範学校長アードルフ・ディースターヴェークはモェルスを去り、ベルリン市立師範学校長となった。当時すでに、かれはエルクと一緒にベルリンに連れてゆこうと計画していた。これは3年後に実ることになった。エルクはベルリンに移るまえに、モェルスのある商人の娘フリーデリケ・ホルディングスハウゼン(ルール河畔ケットヴィヒ 1810年生)と結婚した。

師範学校における教職活動の観点からすれば、モェルスからベルリンに働く場所を変えたことは、エルクにとっては決して満足すべきことにはならなかった。教育の前提となる音楽の知識があまりにも学生側になく、多くの生徒たちがこの課目に殆んど興味を示さないことについてエルクはなげいた。その結果、かれはすでに1838年にはヘッセン州のフリートベルクの師範学校への転勤を、また1845年にはシュールプフォルタの学校への転勤を考慮している。大都市における生活もまたかれの気に入らなかった。とにかくかれは再び田舎に転勤したかったようであるが、音楽学上の諸活動では、ベルリンの如き都市のみがさまざまな条件を与えてくれる。これがエルクをひきとめていたのである。

ベルリンで師範学校音楽教師の地位につくやいなや、かれは司教座聖堂コーラスの指揮をひき受けた。とはいえこの歌唱隊の財政基盤や組織・制度的諸前提はこの当時きわめて不備であったので、なにをやってもうまくゆかず、すでに2年後、かれは指揮者をやめてしまった。1824年にフェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ(1809—1847年)が助手になり、ペテルスブルク宮延聖歌隊を模範としてコーラスの再編をはかってからはじめてこの合唱隊は諸成果をあげ、非常な名声を拍すことになった¹⁵⁾。1836年から1847年までエルクはベルリン・ズィング・アカデミーに属した。このズィング・アカデミーは、当時ルンゲンハーゲン教授(1778—1851年)の指導下にあった¹⁶⁾。

1843年になってエルクは自分の構想にもとづくコーラス、エルク男性合唱協会を設立し、ひきつづき1852年にはエルク混声合唱協会を設立した。両合唱団の演奏会は、間もなくベルリンの大きな演奏会には何百人という、いや

しばしば千人をはるかに超える聴衆が押し寄せるのであった。名高い音楽批評家の筆になる批評も、両合唱団の特筆すべき業績について語っている。

エルクは合唱指揮者として有名になったのみではなく、歌曲集、合唱曲集の編集、原典研究に基づく民謡集の編纂によっても頭角をあらわしてゆく。その結果かれは非常に多くの音楽家や音楽学者と知り合い交わることになった。かれがこの人たちとかわした話し合いは、かれの音楽学的諸研究に影響をおよぼすものであったから、かれ自身はこの知人たちについて、自分の音楽の素養を深めてくれる人々として感謝をこめて述べている¹⁷⁾。交わりを結んだ人々には次の如き人々がいた。ベルリンのS・W・デー教授(1858年没)、エルクはこの人と古い記譜法を現行の記譜法に移しかえる作業をおこなった。音楽学者であり「ライブツィヒ・アルゲマイネ・ムズィークツァイトゥング紙」の編集者、ライブツィヒのG・W・フィンク(1783—1846年)。ベルリンの宮廷司教座聖堂オルガニスト、ルートヴィヒ・ヘルヴィーク(1773—1838年)、この人は、ツェルターの協力者であってベルリン・ズィングアカデミーとベルリン・リーダーターフェルにおいて重要な役割を果たした人である。ベルリン大学音楽研究所長A・B・マルクス(1799—1866年)。ダルムシュタットの音楽学者ヨーハン・クリスチアン・マルクヴォルト(1778—1866年)、エルクはダルムシュタット地方をひっきりなしに訪ねていたが、その度にこの人と会っていた。同じくダルムシュタットの法律家ゴットフリート・ヴェーバー(1779—1839年)、この人の職業は弁護士であったが並々ならぬ音楽家、音楽理論家であって、音楽雑誌「ツェツィリア」を創刊し、その刊行をつづけた人物である。

民謡研究の点では、エルクはホフマン・フォン・ファラーズレーベン(1798—1874年)の弟子と自称している。エルクは1841年からホフマンの死まで、個人的な交際、書簡のやりとり、共著の書物により非常に親密な関係にあった。また¹⁸⁾、1847年までベルリンに住み、のちミュンヘンに移り民間にあって活躍したF・フィリッツ博士に対して、エルクは古いコラル研究に関する多大の励ましに対し感謝している¹⁹⁾。エルクはかれと共同で16および17

世紀の巨匠たちの古いコラールの諸楽章を刊行した²⁰⁾。

すでに 1839 年に、エルクはグスタフ・シリングとルートヴィヒ・シュポーア (1784—1859 年) によって設立された「ドイツ音楽・音楽学国民協会」の遠隔地会員に選任されたのであるが、これによってかれの音楽学領域における活動の真価が認められることになった²¹⁾。

1849 年に、当時ヨーロッパの音楽界で指導的な位置にあったオルガニスト、カペルマイスター、そして音楽学者でありブリュッセル音楽院の長であったフランソワ・ヨーゼフ・フェティ (1784—1871 年) がベルリンにやって来た。フェティは S・W・デー教授の紹介でエルクと大いに語るようになった。とくにかれはエルク男性合唱団の演奏練習に立ち会っている。「パリ音楽雑誌」に発表した論文において、フェティはベルリンで受けた諸印象を報じている。その報告でかれはとくにエルクの民謡研究、音楽教育、教会音楽の領域における活動を大いに賞賛した。

自分の諸刊行物を通じて、エルクは他の多くの学者たちや公的活動にたずさわる人々とも接触するに至った。またゲルマニストのフリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲン (1780—1856 年)、フィリップ・ヴァッケナーゲル (1800—1877 年)、アントーン・ビルリinger (1834—1891 年) およびヨハネス・マティーアス・フィルメニヒ (1808—1889 年) などの人々とも書簡による交流をしていた。

おそらくホフマン・フォン・ファラーズレーベンを通じてかれはベッティナー・フォン・アルニム (1785—1859 年) と知り合いになったのであろう。その交際は、1848 年以降に関しては証拠をもってあとづけし得る。1852 年にかの女ベッティナーは自著「デーモンとの会話」(ベルリン 1852 年) をエルクに献じている。かの女はその書物にこう書き入れた、「この本は貴方の義母からのものです。」エルクはこれについて、日記に書き留めている。「1852 年にベッティナー・フォン・アルニムはわたしに贈るために持参してくれた本のタイトルの所にこんなことを書いてくれた——鉛筆がき——」²²⁾。

アヒム・フォン・アルニム「全集」がヴィルヘルム・グリムによって刊行

されるに際して(22巻 ベルリン 1839—56年)、ベッティーナ・フォン・アルニムは、「少年の魔法の角笛」の第4巻目を、アルニムの遺した手稿をまとめて刊行してくれるようエルクに依頼した。その他にもかの女は「魔法の角笛」の大衆版をエルクに出版してもらおうという計画をもっていた²⁴⁾。しかしこの出版は実現されなかった。ヤーコプ・グリム(1785—1863年)ともエルクは良い関係を結んでいたことが日記の記録からも明らかである²⁵⁾。

このような人々との諸関係を過大に評価してはならないとはいえ、やはりこの諸関係は、音楽学とゲルマニスティク、そして教育学に係わる多種多様な関心と多面的な学問上の仕事によって、エルクが次第に確立していった立場がどのようなものであったかを示しているのである。

エルクが緊密な関係にあった上にみた人々の多くは、当時のドイツを覆う絶対主義的支配に反対して、諸地方の政府が民主化のための最初の措置をとるように激励し、また斗いを展開したいろんなグループのどれかに属していた。この意味において、教員関係ではアードルフ・ディースターヴェークが原動力であった。この政治的諸努力にはエルクもまた参加していた。プロイセン王(1840—61年)のフリードリヒ・ウィルヘルムIV世は、1849年に「訓戒」を宜し、神の信仰と王の臣下たる忠誠心を根絶やしにした責任をとらせるために、師範学校教員を減給処分にした²⁶⁾。校長ディースターヴェークは、すでに1847年に上に述べた政治的な問題が理由で免職され、正当な時期の来ないうちに退職させられてしまった。エルクは職にとどまっていたが師範学校でけん疑を受けた教師たちの仲間属し、当局から睨まれていることを給料の問題からさとした。かれは何年間も昇格させられなかったし、また他の教員とは反対に昇給もさせられなかった。

エルクはまたホフマン・フォン・ファラーズレーベンが政治的理由からベルリンを追放されたとき、汽車まで見送った人であり、その後もかれと連絡をとり続けた。「わたしにとってかくも友人の多いベルリンも、友として何かをしてもらいたいと思うと、とたんに友人がみな消え失せてしまう」。とホフマン・フォン・ファラーズレーベンは1850年6月8日付でルートヴィヒ・

エルクに書いている。そしてかれは二三のたのみごとを果してくれるよう依頼した。エルクにあてたホフマンの多くの手紙。それもちょうどこの時期に差し出されたものは、エルクがこの苦しい時期にホフマンの味方になっていたことを示している。かなり多くの共著の刊行物は、ホフマン・フォン・ファラーズレーベンとエルクのこの長期にわたる友情の成果である²⁷⁾。大衆が主導権をにぎってやる民主化や、ドイツ連邦の結成を宣伝するあらゆるものをやっつけていた政府は、エルクとホフマンの共同の著述活動にも権力をもって食い込んで来た。とうとう 1852 年 12 月にホフマン・フォン・ファラーズレーベンとエルクによって出版された「ドイツ民謡本」(ライプツィヒ 1848 年)は、「警察の手によってつぶされてしまった」。この様子をエルクは日記に書きとめている²⁸⁾。

エルクはドイツの様々な地方への旅行を企てた。かれは母や、妹のアンナ、その夫ルートヴィヒ・グロックを訪ねるときに、オーデンヴァルトや、ダルムシュタットとハイデルベルク間の山岳地帯にある村々をとおる徒歩旅行をしばしばやっている。ハイデルベルクからさかのぼるネッカル谷、ライン中流地方、キンツィヒの溪谷、上ヘッセン、チューリンゲン、ハルツ、マグデブルク周辺、さらにベルリンの近郊とくにオーデル・ブルッフ、さらにザクセン、シュレーズィエンおよびポエーメン地方に至るまでの各地を、かれは度重なる旅、徒歩旅行によって知った。かれはある場所に汽車か馬車で到着すると、友人たちとしばしば何日も歩き、名所を訪ねたり、またうたを探しだしては記載する、という目的をもって歩きまわった。この旅行や徒歩旅行に関しては、かれの日記中の諸記録が伝えている。記録は要点を書きつけ、それぞれ旅行目的を挙げているという形で極めて簡潔になされているとはいえ、実に一目瞭然たるイメージをあたえてくれる。

かれは率いる男性合唱団ともザクセン・スイス、ハルツ、チューリンゲンおよびラインの諸地方にかなり長期の演奏旅行にでかけている。かれがこの諸旅行を企てた意図は、団員間の交流を深め、さらに若干の予定した演奏と即興演奏によってこの合唱団の宣伝をするということであった。

広範な旅行をルートヴィヒ・エルクは企て、有名な図書館を訪ねた。それというのも、うたの研究や学術上の発表のために必要とする、うたの記録や書物を調べあげるためであった。この目的のために、かれはベルリン市内の図書館以外にグルムシュタット、ハイデルブルク、シュトゥットガルト、ミュンヘン、ニュールンベルク、カッセル、ハーノーヴァー、ゴettingen およびヴォルフエンビュッテルの諸図書館を訪ね歩いた。

家庭生活の方では、かれの人生はきびしいものであったといわなければならない。かれには7人の子供たちがいた。息子の一人は幼少で、また娘のマティルデは18才にしてこの世を去った²⁹⁾。すでに1848年に、かれの妻は8番目の子供を出産しようとして死去した。当時2才から12才までの子供たちが残されていたわけである。かれにとって妻の死は大きな打撃となった。この過酷な運命に堪えてかれは長年にわたり学問研究を続けなければならなかった。のちにかれの息子のうち二人はアメリカに渡った。オットーの方はかれと手紙のやりとりが続いていたが、ルートヴィヒという息子の方はアメリカで消息が絶えてしまった。エルクはすでに60才を過ぎてからドロテア・ホルツハウアー（旧姓リューデッケ 1826—1906年）という、親しくしていた教師の未亡人と再婚した。

高令になってから、師範学校音楽教師としての、また学問分野におけるかれの諸業績は当局からも認められた。1857年にかれは宮廷指揮者の称号を与えられ、1873年にはかれは「赤いわしの勲章」が授けられた。1862年にかれはニュールンベルク・ゲルマーニッシェス・ムゼウムの学術委員会正会員に任命されていた。1876年6月10日、かれの勤続50年記念の日に、師範学校はかれの意向に反して大々的に記念行事を行い、とくに教授称号を与えた。

同年かれはエルク混声合唱団の指揮をかれの教え子、後の宮廷指揮者グスタフ・ゲーブルに譲った。男性合唱団の指揮の方は74才になって、すなわち1881年にやっと止めた。

1877年3月22日、かれは師範学校音楽教員を退職した。そしてかれは未完の学問上の仕事を完成したいと思った。しかし間もなくかれの健康状態は悪

化し、仕事を完成することができなくなった。

ルートヴィヒ・エルクは、1883年11月25日死去し、ベルリンのエリーザベス墓地に葬られた。かれの墓は今日ベルナウアー街の両ドイツ国境の背後(東側)にある。

(昭和51年5月20日受理)

- 1) アーダム・ヴィルヘルム・エルク 1779年3月10日 ザクセン＝マイニンゲンのヘルプフに生る。マイニンゲン師範学校卒; 教師兼書記; 1802年8月10日以降ヴェツラー教会合唱指揮者, オルガニスト兼教師; 1811—1812年ウォルムに移住; 1812年フランクフルト移住; 1813—1820年ランゲン近傍ドライアイヒェンハインの書記, 教師兼オルガニスト; 1820年1月31日死去。
- 2) アンナ・バルバラ・エルク(旧姓ゴェート) 1783年ヴェツラーに生る。1866年5月17日死去。
- 3) ヨーハン・バルタザル・シュピース 1782年オーバーマースフェルト(ザクセンマイニンゲン)に生る。1799年マイニンゲン師範学校卒。1801年フランクフルトのケンマート学校の教師; 1805—1807年ギーセン大学に学ぶ; 1807年ラウバハにおいて教頭; 1811—1830年オッフエンバハ・アム・マインにて第二司祭, ベルナルト学校教師; 1831—1841年フランクフルト近郊シュブレントリンゲンの首席司祭。
- 4) L・エルク:「ヨーハン・バルタザル・シュピース」(「ドイツ音楽協会及び愛好者のための雑誌」) 1841年1号 389—392頁。
シュピースに関し: (「音楽学および音響芸術レキシコン」G・シリング編) シュトゥットガルト 1849年。
F・W・ゾンマーラート:「オッフエンバハ・アム・マインの学校制度の歴史」オッフエンバハ 1892年 95頁以降。
Ed・ベルレ:「ヨーハン・バルタザル・シュピース。ヘッセン国民教育運動の先覚者」(「フォルク・ウント・ショレ」誌) 1929年7号 51—54頁。
- 5) ダルムシュタット学校新聞におけるシュピースの諸論文。特に「学校と家庭における歌唱の教授について」, 「歌唱協会の目的にかなった構成について」, 「一般歌唱協会の規約について」, 「男性合唱について」, 「教会合唱団について」, 「ダルムシュタット地区の四部合唱について」, 「民謡歌唱本について」, 「教会音楽について」。
- 6) 正式なタイトルは, 「ベスタロツィの原則による歌唱教育理論, 教育学的基礎づけミヒアエル・トラウゴット・ブファイファー, 方法的整理ハンス・ゲオルク・ネーゲリ」。チューリヒ 1810年。

- 7) 小合唱団のための手書きのノートは(ソプラノ、アルト、テノールおよびバスにそれぞれ)、28 合唱曲、うちモーツァルト作曲 16、ハイドン 5、デュシェク 5 である。
- 8) ディースターヴェークによるエルク招聘について: アンナ・バルバラ・エルクあて ディースターヴェークの書簡 1826 年 4 月 23 日付。
エルクがシュピースのもとを去った理由について: ダルムシュタットのヨーハン・ハインリヒ・クリスチアン・リンクあて L・エルクの書簡 1831 年 6 月 1 日。
- 9) 献呈の辞: わが師ヨーハン・バルタザル・シュピースに捧ぐ。その教えと書物により功績高き司祭および教師にして、わが名づけ親、養父たるシュピースに永遠の愛をこめて。
- 10) L・エルク: 「さまざまな作曲家による単声、二声、三声、四声合唱曲集」エッセン ベーデッカー 第一分冊 1 1828 年, 第二分冊 2 および 3 1829 年, 増補版 1834 年。
- 11) 付録参照: エルク著作目録—— 児童および学校歌集。
- 12) 参照: ダルムシュタットの J・Chr・H・リンクあてエルクの書簡 1831 年 6 月 1 日。
- 13) 同: L・グロックあてエルクの書簡 日付なし(推定 1838 年)。
- 14) 同: 同 1845 年 8 月 5 日。
- 15) カール・シュルツェ: 「L・エルク」ベルリン 1876 年 26 頁以下。
パウル・オーピッツ: 「ベルリン王立司教座聖堂設立 50 年記念によせる略史」ベルリン 1893 年。
ホウゴウ・リーマン: 音楽辞典(1916 年版)。「ドームコール」の項 254 頁および「エルク」の項 290 頁。
- 16) マルティン・ブルンマー: 「ベルリン・ズィング・アカデミー史」ベルリン 1891 年 249 頁。
- 17) L・エルク 年譜 1867 年 19 頁。
- 18) ハインリヒ・ホフマン・フォン・ファラーズレーベン: 「わが生涯」ベルリン 1892 年。その中ではじめてエルクに触れている箇所: 「ルートヴィヒ・エルク来訪。かれは王立師範学校の音楽教師である。かれは W・イルマーと 6 冊の『民謡とその旋律』を出版した。これは価値ある歌集である。……。かれは魅力的な研究をやり蒐集も多い。われわれはほとんど民謡について語った」。
ホフマン・フォン・ファラーズレーベン 書簡集 (H・ゲルステンベルク編集 ベルリン 発行年不詳): 「わが友に」。
- 19) L・エルク「年譜」1867 年 19 頁。
- 20) 「16 および 17 世紀の巨匠の四声合唱曲, L・エルクおよび Fr・フィリッツ編」エッセン 1845 年 (150 合唱曲)。
- 21)
- 22) L・エルク「日記」第 2 冊。

- 23) 「少年の魔法の角笛」 L・A・フォン・アルニムおよび C1・ブレンターノ蒐集による古ドイツ歌集。第4巻、アルニムの手書き遺稿によりL・エルク編 ベルリン 1854年。(全集 新版—W・グリム編— 第21巻 遺稿:第5巻)。
- 24) L・グロックあてL・エルクの書簡 1861年6月5日。「この機会に君に言っておきたい。アルニム夫人がわたしに魔法の角笛の第4巻(しかも御主人の遺稿原稿により)の出版を依頼された。それから(私の編集により)魔法の角笛の大衆版を作成しなければならない」。
- 25) 1855年9月エルクはJ・グリムを訪問し、グリムに「Eドイツ民謡集」を贈呈した。エルクは1855年12月24日J・グリムから「ドイツ神話学」を贈られ、手紙がそえてあった。1859年11月のシラー祭に際してL・エルクはJ・グリムから酒杯を贈られた。——今日ヴェツラーのエルク文庫に所蔵。エルクはシラー祭を記念して歌曲を刊行した: 1) シラーの歌曲。エルク編曲混声合唱曲 ベルリン 1859年。2) シラー祭のための男声6部合唱曲(1859年11月10日), およびその他多声用曲 エルク編 ベルリン 1859年。
- 26) ヴォルフガング・クラフキ:「教育科学」フランクフルト・アム・マイン 1970年 33頁。
- 27) L・エルクおよびホフマン・フォン・ファラーズレーベンの共著:「学校歌集100曲集」ライプツィヒ 1848年。「若きドイツのための37曲集」ライプツィヒ 1848年。「ドイツ民謡本」ライプツィヒ 1848年。「兵士の生活」「新しいうた(……)」ベルリン 1852年。「たのしくうたおう」。詩の歴史に寄せて ハノーファー 1854年。「ドイツ教会歌史」ハノーファー 1854年。「民謡風歌曲集」ライプツィヒ 1869年。「16および17世紀のドイツの社交歌集」ライプツィヒ 1860年。「四季」ベルリン 1860および1864年。「新旧兒童歌集」ベルリン 1873年。
- 28) L・エルク「日記」第2冊 20頁。
- 29) L・エルクにあてたホフマン・フォン・ファラーズレーベンの書簡、クリスマス 1855年。この12月7日エルクの娘が死去したのであった。詩は、「父と子らは、広間に入り来る……」。第5詩節「クリスマスツリーは明るい燈をつけてかゞやくが、そのかゞやきの中で父の心は憂いにしずむ、数日前に最愛の娘を失ったのであった」。